

第1回「現場に学ぶ医療福祉倫理」課題レポート

学籍番号：26S1129

氏名：竹本大輝

このたびは、貴重なお時間を割き、9月9日に「万華鏡で見る医療と福祉 ～優しき挑戦者たち～」についてご講義いただき、誠にありがとうございました。

今回の講義を受講して、「亡き優しき挑戦者たち」に共通するものとして、私は2つあると考えました。1つ目の共通点は、「患者を一人の人間として見ていること」です。そして、2つ目は、「当たり前を疑い、常識を覆そうとしたこと」です。

印象に残ったのは、石川信義さんがつくられた全開放の精神病院です。「鍵をかけない」、「閉じ込めない」という考え方は、当時の精神医療において、患者を病院の中で管理することが主流であったことを考えると、とても大きな挑戦であったのではないかと思います。患者同士の男女交際を公認したり、ディスコをつくって交流の場を設けたりしていたというエピソードを聞いた際には、大変驚きました。しかし、患者を「病気を持った人」として特別に扱うのではなく、一人の人間として当たり前の生活を送ることを大切にしていたからこそ、この取り組みができたのだと感じました。そして、この環境が患者自身の「治療を頑張ろう」という意欲にもつながるのではないかと思います、素敵な取り組みであると感じました。

また、石川誠さんのリハビリテーションの思想についても、同様に「患者を一人の人間として見る」という考え方があると感じました。初台リハビリテーション病院では、従来の入院リハビリテーション病院とは異なるアプローチを行い、経口摂取を推進したり、排泄は可能な限りトイレで行ったりするなど、患者さんが自分でできることを増やしていくことを大切にしていました。ただ病気を治すためのサポートをするだけでなく、退院後も不自由なく、その人らしく自立した生活を送れるようになるまでをリハビリテーションの目的としている点が、とても印象的でした。

近藤誠さん、なだ・いなださん、唄孝一さんのインフォームド・コンセントに関する取り組みにも「患者を一人の人間として見る」という考え方を感じました。当時は、医師が患者に病名や治療についてどこまで伝えるのかを慎重に判断していたことを知りました。しかし、これらの方々の活躍により、患者自身が自分の病気や身体の状態を知り、そのうえで今後の治療について自ら選択することが重視されるようになり、現在のインフォームド・コンセントにつながっていることを知りました。

このように「優しき挑戦者たち」が取り組んだことはそれぞれ異なりますが、その根底には「患者を一人の人間として尊重する」という共通した思いがあったのではないかと感じました。

今回の講義を通じて、医療や福祉において大切なのは、ただ決められたことを行うだけではなく、患者さんの立場に寄り添って考え、一人の人間として尊重することだと学びました。そして、「当たり前」を覆すことは簡単なことではありませんが、その「当たり前」が本当

に正しいのか、患者さんのためになるのかを疑い、自ら考えることは、医療従事者にとって必要な姿勢なのではないかと感じました。

このような貴重な学びの機会をいただき、本当にありがとうございました。今回の講義で学んだ「優しき挑戦者たち」の姿勢を、これからの学びや医療従事者として自分の姿勢につなげていきたいと思います。